

そうそう、最近は夜寝ると弘法大師様が枕元にあらわれるようになりまして。本当ですよ。20回ぐらい回っている人でもまだ弘法大師さんに会っていない人がたくさんいる中で、僕はまだ全部回っていないのに夢の中に出てくるんですね。すばらしいですよ。

高知を私のようなシルバーIターンの聖地にしたいと。そのための情報発信が私の役割かなと思って、本当は来たくなかった東京に今日は来ております。ということでございます。



【松田】 どうもありがとうございました。さっきの自転車、印象的ですよ。私は黒笹さんと高知でお会いしたときに、居酒屋で待ち合わせしたときに、その前に自転車が、黒笹さんがあらわれて結構びっくりしました。

「人生なんてパッと変わるさ」というのは非常に印象的な言葉だと思います。では、会場の中で、今の御報告について御質問、御意見ある方、いらっしゃいますか。よろしいですか。今回、セカンドキャリアを考えるに当たって、失敗しないセカンドキャリアデビューという題名をつけているんですけども、それぞれ皆さん今日御報告いただいた方々がどんな視点で今に至ったかと。さらに、多分皆さん、本当は今日さらりと話していますけれども、大変な苦勞あるいは努力をされていると思います。その中でのターニングポイントは何だったのかということ。それから、これから皆さんに向けて、どういった点が重要かということの後半にお話ししたいと思います。



【松田】 前半は、パネリストの皆さん、素敵な報告をどうもありがとうございました。

それでは、前半のそれぞれの皆さんのストーリーを振り返って、パネリスト同士でそれぞれの報告者に対して質問、御意見をいただければいいかなと思っております。

じゃあ、まず臼井さんの御報告に対して中村さんから、それから栗原さん、黒笹さんから、それぞれ質問を1つずつお願いします。

【中村】 私から。臼井さんからチューニング機能、周波数を調整していくという話があったので、そこら辺、具体的に御自身が微調整していったかというようなところをもうちょっと詳しく聞きたいなと思います。

【臼井】 ワン・バイ・ワンでいいんですか。

【松田】 ワン・バイ・ワンで。

【臼井】 わかりました。そうですね。どうやったんでしょうね。

【中村】 自動修正した。

【臼井】 自動修正。ともかくピントがずれているとか話が合わないなという経験を何度かまずしました。

例えば、私は昭和高度成長期、売り上げ右肩上がり当然の仕事をしていた中で、結果が出ない、何でやっているの、そのためにみたいな話を、例えば地域の方とお話しすると全然合いませんよね。何でこんなに合わないのかなという経験を多分していたんじゃないかなと思いますけど、それがその時点ではチューニングだという感じはしなかったですけど、そんな経験を結構しました。いつも娘とか、娘と息子がいるんですけど、と話している場面を外でやっているみたいな。何でこんなに話が合わねえのかなと。親子だと俺の言うこと聞けモードだからいいんだけど、ほかだとそんなわけにはいかないんで、そういう経験はしましたね。

【松田】 じゃあ、栗原さんはどうでしょう。

【栗原】 臼井さんに、あえてつらい、思い出してしまいたくないようなことを質問しちゃうかもしれず、失礼かと思うんですけど、社内失業、これは会社が倒産していないのに社内ポジションがなくなるみたいなことかなと思って、もうちょっと詳しく教えていただきたいのと、起業してつながりが楽しいとおっしゃっていましたので、そのつながりの種類の違いみたいなのを教えていただけると。

【臼井】 実は、もといた会社の人がいることを先ほど発見したので、あまり言っていないのかどうか、急に不安になりましたけど。

【松田】 いらっしゃるんですか。

【臼井】 そのまま申し上げると、私、ここはオフレコなのかどうかわからないです、エプソンという会社にいたんですけども、プリンターとかプロジェクターで結構御存じの方もいらっしゃる会社だと思うんですが、ここは中に使われている部品を扱ってました。これをプリンター、プロジェクター以外の、エプソン以外の、エプソンがやっていない商品のところにも売る部隊がありまして、私はその販売の責任者をやっていたんですけども、そのときに新規事業ということで、我々の位置づけでいうと、新しい部品を事業として新たな商品ラインにしようということをやっていたんですけど、結論からいうと、会社全体がちょっと右肩下がりがくつとなったときに、部品なんてやっていたってしょうがねえじゃねえかと。どうせうちの事業はプロジェクター、プリンターなんだから、そこに専念しようといって、ばさっとその部隊の販売系が切られちゃったときに、私は最初にメンバーの社内の中での行き先を考えていて、そのとき自分は全然思わなかったんですけど、行き先、全部終わった後に、じゃあ、次、僕何やりましょうかねと言ったら、いや、おまえ、もう仕事ないからって。それが社内失業のきっかけとかですかね。

【栗原】 種類が何か違うんですかね、やっぱり。サラリーマン時代と。

【臼井】 ひょっとすると、会社の中にもできることだったとは思いますが、今振り返ると。会社の場合はやっぱり仕事に、僕は表裏的に嫌いなのは、よくウイン・ウインとかってあるんですけど、メリット、デメリット、どっちがいいのかわるいのか、お互いが勝つにはどうしましょうかみたいなことで協働、こういう感じだったんですけど、今はまず最初に、さっきの夜通路じゃないですけど、とりあえず馬が合っちゃって、意見をああでもない、こうでもないとかいって、へー、ほーなんて言っているところから、場合によると、ちょっとこれ一緒にやりませんかみたいな、順番が全然違っているな、そういうつながり方があるなと思っています。

【栗原】 ありがとうございます。

【黒笹】 じゃあ、僕の質問ですね。先ほど大変に僕が印象的だったのは、財産と荷物という、ごみ袋とびかびか輝いているものが2つ対照で出てきたんですけど、これ、もうちょっと聞きたいなと思い、自分の持っている知見なり経験なりが財産にもなるし荷物にもなるぞということだと思えるんですけど、それは財産なのか荷物になるのか、決める要素って何なのかなと思ひまして。

【臼井】 なるほど。要素かどうかわからないんですけど、結果的に決めるのは相手方かなと思っていて、例えば僕、海外にいた経験がありますと。ドイツ人はこういう性格をしているんだよと。これは経験していますよね。なので、例えば、ハマちゃん、ドイツ人とはこうやってつき合うんだぜといたら、多分お荷物系になると思うんです。

【臼井】 ところが、ドイツ人と知り合うためには、やっぱりドイツ人の人をよく知らなきゃいけないし、彼らのいいところ、悪いところ、彼らは日本人と同じで勤勉なんて思ったら大間違いで、実は怠惰な遊び人、それをロジカルにやるみたいな感じなので、例えばそれがわかると、すごくおもしろくて、じゃあ、それを例えば、いや、ハマちゃん、ドイツ人とつき合うとさ、こんなおもしろいことがあるんですよみたいな話を僕がして、おもしろいねという話になると、自分の経験が生きていけるみたいな、そんなことで、多分相手が決めてくる部分に自分が気づくということじゃないかと思ひます。

【黒笹】 じゃあ、1つの財産、それは財産にもなるしお荷物にもなるというのは、要するに相手がそれをどう判断するかによるということですよ。

【黒笹】 そうすると、自分の持っているものが全部ごみの場合もあるわけですよ。

【臼井】 いや、絶対ないと思ひます。

【黒笹】 それはないですか。

【臼井】 だって、世の中、変な人いっぱいいて、自分じゃごみだと思っても、すごいいいねって言う人、絶対出会いますから。これは本当です。あり得ないです、それは。それは、僕は断言します。自分の経験として。

【黒笹】 それは安心しました。

【松田】 私から質問というのは、多分セカンドキャリアを踏み出すに当たって、僕はその考え方でいうと、臼井さんの場合は準備期間というか助走期間がよかったのではないかと。それは、集う場があった。それがさっき言った3×3Laboとかフューチャーセンターだったと思ひますけども、おそらくそこで今までの自分と価値観が違う人に会ったと。そういうところで新しい発見があったと思ひますけども、3×3Laboやフューチャーセンターを振り返ってみて、改めて気づき、こういうところがよかったというのがあれば教えていただけますか。

【臼井】 その前の質問と合わせて、今の松田さんの質問を聞いて、また気づいちゃったんですけども、さっきも言ったように、僕はマーケティングが専門でやってきていたので、実は会社以外に行っているときが多くて、しかも今おつき合いのないような業種だとかおつき合っていたから、ひょっとするといろいろチャンスはあったみたいなんです。実は外に行っちゃべると、僕、人としゃべるのが大好きなので、しゃべりが大好きで人の話をあまり聞いていないという問題もありましたけど、戻すと、やっぱりあれかな、会っている時間を物理的につくるだとか、いろいろな人と会うこと自体もちろん大切ですけど、自分の話じゃなくて、相手が何でこんなことが好きなんだろうとか、こんなことをやっているんだろうかという興味を持った瞬間に大分よくなる、よくなるっていうのは、さっきのチューニングが変わってくるんじゃないかと思います。

【松田】 なるほどね。相手のことをわかろうとすることを、知らず知らずのうちに始めていたんでしょうね。

【臼井】 そうですね。何か恋しちゃうみたいなの。

【松田】 恋しちゃう。(笑)

【臼井】 それは言い過ぎですけど。

【松田】 あと、私、以前、臼井さんと話していて、そうだなと思ったのは、会社においてある程度の役職の人だと、話をすると、この人は一体どういうことを話してくれるんだろうというふうに、周りの人が全神経を集中して聞いてくれると。会社の役員の挨拶とか聞いてみると、相当よくわからない言い方で、しょうもないことをしゃべっているんだけど、みんな、専務のお言葉はどういうことなんだというのを全神経を集中して聞いてくれるというのがあるわけです。

だけでも、さっき言った3×3 Laboや丸の内プラチナ大学フューチャーセンターに行くと、完全に上下関係はないんですね。話すときに、まさに他流試合というか、真剣勝負なんですね。最初の1分でつまらないと、異様につまらない評価をされる。専務はどんなお言葉を投げかけてくれるんだなんて誰も言ってくれないといったときに、僕はよい意味での他流試合というのかな、平場の目線でお互いが真剣勝負するというのがポイントではないかと思いました。

あと、臼井さん、おやじギャグが好きなんで、今日、駄じゃれとか、もっと言っていていいですよ。(笑)

【松田】 じゃあ、改めて臼井さんの報告の中で、会場のほうで御質問、御意見ある方いらっしゃいますか。

【質問者】 私の経験なんかも含めて感想を述べたいと思うんですけども、今、コーディネーターの方の話をずっと聞いておりますと、退職してから新しい社会に入っていくについて、そこで世の中と新しく触れ合っていくといいですか、そういうことが必要であろうと思うんです。

それで、私は会社を退職してから、先輩の紹介で地域のグループに入っているんですけど、そこは100人ぐらいいるんですが、いろいろなお世話人なんかがいまして、会員発表会だとか、それから探訪会だとか、工場見学だとか、外部講師を呼んで世の中の話の聞くとか、そういうことをやっているわけなんですけど、その中に入っているわけなんですけど、皆さん、会社を辞めると、会社は総務課とか庶務課とか、そういうみんなの世話をしてくれる人がセクションとして給料をもらいながらやってくれるところがあるわけなんですけど、会社を離れますとそういうことをやってくれる人がいないわけで、だから自分たちで背負ってお世話をしていかななくては行けないと。だから、そういうことで、1つは閉じこもらないで積極的に仲間をつくっていくということと、それから、お世話をするのを嫌がらないで、積極的に皆さんのお世話をしていくということによって、新しい友だちができるとか、いろいろな新しい世界が開けてくると。こういうことがあるんじゃないかと思うんです。

それから、大きい2番目に、それで今の方々といいますか、コーディネーターの方々は何らかの収入を得ておられるような感じなんですけども、退職して年金だけで果たして豊かな生活ができるかということを見ると、今の世の中は決してそうではないんじゃないかと。お金はたくさんあれば、ますます便利でいいわけなんですけど、そこに金のもうかる仕事をやることができないかということで、私は恥ずかしい話なんですけど、在職中は皆さんどんどん年限が来ると上へ職がついて上がっていくわけなんですけども、どうも私は運が悪かったのか、力がなかったのか、仲間がどんどん上がっていくのに、どうも上がっていかないと。人事考課が非常に悪かったわけです。これでは満足できないということで、資格を取ろうということで、30歳ぐらいになってからやりまして、その後も運がよかったといえば運がよかったんですけど、その後の仕事を今も続けていますけど、少しずつ収入があるということと、そういうことで、積極的に出ていくということと、高齢者の収入があるような方向を見つけていくことが大事なんじゃないかなという感じを持っております。

以上です。

【松田】 ありがとうございます。意見ということで何えばよろしいでしょうか。

【松田】 今、御自身が資格を取って仕事をされているとおっしゃられましたけども、それは二期作なんですか、それとも二毛作、新しいことをやるようなものか、それとも延長なのか。

【質問者】 それは2.5ぐらいといいますか。最初、会社に勤めたんですけど、その間の30歳ぐらいから始めた経験が生きているということもありまして、全く新しい仕事を始めたということではないんですけど、運がよかったといえば運がよかった。

ただ、借金をして会社を立ち上げたりすると、うまくいかないと借金だけ背負ってしまって、家も取られてしまうという話を聞きますけども、そこで私は金のかからないような仕事を始めたということで、手数料だけが収入ですけどね、そういうことで、あえて年をとってから借金をつくらぬような仕事を見つけていったということがあるんですけどね。

【質問者】 そういうことで、今も元気でやらせていただいております。

【松田】 ありがとうございます。引き続き元気にセカンドキャリアを続けていただければと思います。

今の御意見の中で、積極的に外に出るというのは非常にそのとおりだと思います。それから、年金だけだとやはり厳しいというのもそのとおりであって、ボランティア以外で、ある意味、お金を稼ぐというのも必須だと思います。ただ、私、そうはいつでもなかなかお金を稼ぐのが難しいのであれば、そこは政策や制度設計で何かできないかと。今日、せっかく内閣府主催のイベントなので、政策目線で言えば、例えば働いたものを、対価をお金じゃなくてポイント制のようなもので、それが自分の市町村の商品券や地域通貨として使えるようなものが大事じゃないかなと思いました。ほかに、臼井さんの件で御質問のある方いらっしゃいますか。いいですか。どうぞ、後ろの方。

【質問者】 どうもありがとうございました。大企業に勤めていらしたということで、起業するに際してはやっぱり大企業であればあるほど収入面の落差がかなり大きくなると思うので、要するに起業して収入が出なかったことについての不安がなかったのかということと、起業すると大体家族は反対すると思うんですけども、家族に対してはどういう説明をされたのかということと、ここにパネリストとして出席されているということは、起業がうまくいったと解釈して、起業がうまくいくためにはどういったことに気をつけたらいいのか。

【白井】 期待に応えられる回答ができるかわからないんですけども、やっぱり起業するとき、不安、特に経済面の話、今も出ました、これは当然あって、シミュレーションを死ぬほどしました。死ぬほどしたけど全然わからなくて、結論は、実は先輩が技術屋なんですけれども、彼はまだ会社にいます、が非常におもしろいことを図解して説明してくれたんです。

私、30年会社にいたので、あと10年ぐらいでもらえる金額、想定できますよね。そこから自分が今度無収入になったときの、無収入とは言わない、もちろん起業するから少しはお金をもらえるだろうと計算するじゃないですか、そのぶれ幅と、それから、若いとき、例えば20歳のときに起業したときの生涯稼げる金額とどれぐらい差があるかというのをシミュレーションでやるんですけども、当たり前ですけど、20代からやるほうがものすごい振れ幅が大きい。これがリスク。

もう1つが、健康。健康は20代で健康が多少だめでも、あとの残り30年あるからとかいうことで、健康のリスクと、それから、今50歳になっちゃって、例えばつまらない仕事をずっとやっていて不健康になるとどっちがいいかなんて、そのリスクを図解して説明してくれたんです。リスクの大きさを。

そうしたら、何だ、金額の差ってあまりないじゃんという話に思えて、それがよかったのか悪かったのか、わからないです。私はそこで納得しちゃって、じゃあ、まあいいや、シミュレーションそこそこでというのが1個目の話です。それから、家族のほうは、これは超意外で、私がいよいよ決めて、嫁さんに辞めるぜと、俺はもう決めた、辞めるという話をしたら、一言、「何だ、やっとならんだ」と言って、全然動揺ないんですよ。すげえな、この奥さんとか思って、感動しちゃって、俺、本当に辞めるんだぜとか言ったら、「いいじゃん、前から辞めたいんでしょ、辞めれば」と。その後は、10秒ぐらいたってからかな、「教育費と生活費は変わらないよね」。これ、順番が逆だと僕も文句を言いたくなるんですよ。「え、やめるの？ 何で？ 生活費どうなるの」って言われたら、いや、俺だってそりゃ一生懸命悩んでさ。でも、逆に「いいじゃん、辞めたら」と言われると、言えなくなる。

これ、嫁さんがすごいなという話ものろけでしたいんですけども、実はやっぱりふだんから見ているんですよ。何かそわそわしているとか、何かあちこち行っているとか、いつの間にやら起業の仕方みたいな本を買っているとか、そういうメッセージが半年や1年続いていると、何も言わなくても覚悟しているんです、実際は。それがいいのかなと思いました。

最後の質問は、経済的なお話でいうと、全然うまくいっていません。これはさっき言ったシミュレーションの範疇にはまだ入っているのでこうやってにこにこしていますけれども、ただ、本当にこの1年間、まだたっていないんですけど、0歳企業なので、昨年12月に辞めて、既に、多分僕は本当に10分以上しゃべっての名刺交換が600枚、700枚以上になっています。単に名刺交換じゃないですよ。10分以上は最低でもしゃべって。それだけのオポチュニティーを今いただいている中での話なので、何とかなるんじゃないのという感じはしています。なので、これを成功というのか失敗なのか、ちょっとわかりませんが、そんな感じです。

【質問者】 社内失業されて、流れで起業されて……。

【白井】 流れ。(笑)

【質問者】 流れという感じがするんですけど、もしかしたら我慢していると、またエリートコースになったかもしれないじゃないですか。だから、結果的によかったというところはわかるんですが、会社勤めとフリーと、絶対的にフリーがいい、フリーというか今の零細企業でやるような、そういうものの方がいいと思われていて、やっぱり会社組織自体に限界があると思われているのかというのが1つと、あと、再雇用というのがわりと社内失業に近いと思うんですよ。仕事はやるけどあまり期待していないみたいなのところ。そうすると、再雇用になった場合は、その流れでいうと、あまり組織にいるよりは、頑張って再雇用されているよりは、出たほうがいいのかと思われているのか。その2つを。

【臼井】 エリートコースだったかどうかは別にして、私は社内失業していた間に、やっぱりやることないので、もともとマーケティングなのでいろいろ企画するのが好きで、そのとき構造改革という名のもとに1,000人近い人が大変な目、大変な目というか、ともかくウェイティングになっている時期がありまして、もったいねえなと思って、人事に企画書を出したんです。こういうふうにやったらとかみたいなのを。暇なので。そうしたら、こういうやつを放っておくと、集めて何かしでかすとやばいからといって、じゃあ、あなたが社内失業部屋の班長をやりなさいみたいになっちゃって、やらせていただきました。そのときに、単なる勉強会じゃなくて、企業研修とか外部に出していたものを中にいる人たちでできるじゃんとかいってやったりだとかして、結構いろいろ動いていたんですね。

そうしたら、やっぱり案の定というか、しぶとく死なないな、あいつみたいな感じになっていて、また別の部門から新規事業のところで是非やってくれという話になったんです。これは本当にその時点ではうれしかったんですけど、ところがやり始めたら、さっきの話に戻るんですけど、やっぱり大企業なので、これから新規事業を僕がゼロから一緒に初めて、5年、10年かかるなど思ったときに、ちょっと難しいなど。もうちょっと僕、自分でやりたいということが、新しいことを試してみたいということだったんだなと気づいて、それで最終的には辞める判断をしました。

それから、再雇用の問題というのは非常に全体的な日本の問題になるんじゃないかなと思っているんですけども、私自身はよくこういう話をするときには、何せ人事にも1年ちょっといたんですけども、今、企業から見ると、20年、30年、9 to 5、9時から5時までフルタイムで働いてくれる人で100%、1万人以上の会社を回しても、日本では現実的じゃないなど。つまり、いろいろな働き方を組み合わせて会社全体の仕事につなげるということが会社自体にとっても必要ですから、再雇用という年齢だけの話ではなくて僕は思っているので、再雇用でいいか悪いかというのは、会社側でどうこうというのは、今言った話で会社は考える、それから自分は自分で考える。何せ30年以上投資した人材が、最終的に投資回収の場で会社に役に立つのか立たないのかというのは、本人たちもそうだし、会社もそうだし、全然方向感がずれていないので、一緒に考えればいい話だなと思っています。

【松田】 では、続きまして、中村さんの報告に対してそれぞれパネリストの方から質問をしていただきたいということで、臼井さん、いっぱいしゃべっちゃったんで、黒笹さんからいきますか。黒笹さんが中村さんに対する質問をお願いします。

【黒笹】 僕はうちの奥さんから社内の内部の実態とかいろいろ聞いていますので、タコ部屋のようなところもあるしということで聞いているので、すごく質問しにくいんですけど、僕が一番聞きたいのは、一番ピンチのときに、例えば会社が立ち行かなくなったときに、社内ではどういう役割を担っていたのかということと、それに対して中村さんは会社のそういう係の事態をどういうふうに解釈して、自分としてはどういう行動をとろうとされたのかというのは聞きたいと思います。

【中村】 会社が経営破綻になるときに、私は現場のマネジャーとして乗務員を送り出す仕事、そして、帰宅して迎え入れる仕事をしていました。ちょっと思い出してきてしまうんですけども、でも、やはり羽田だったんですけども、そこに富士山が見えるんですね。そこでJAL機が飛び立っていくわけです。それで、7時になると私は20便を送り出している。3時起きで5時からシフトが始まります。国内線の仕事ってそういう仕事なので、でも、乗務員たちは本当に何事もなかったようにお客様を迎え入れ、お客様を送り出す。機内で罵倒を浴びせられたことも多々あったと思いますが、その乗務員たちが、羽がぐちゃぐちゃになって、しおれて帰ってきた彼、彼女たちを温かく迎え入れて、楽しく送り出す、その繰り返しです。それだけです。

でも、その当時のことというのは、同じ立場の人間と今話したりするんですけど、蜃気楼のように、記憶喪失感があって、ぶっ飛んじゃって、今、こういう機会を与えられて、コーチング用語でオートクラインというんですけど、そういうこと、あったな、でもみんな頑張ったよなって、職種を関係なく、あの当時のJALのカスタマータッチポイントにいた乗務員たちはすごく頑張っていました。以上です。

【松田】　　じゃあ、栗原さん、どうでしょうか。

【栗原】　　私も同じような質問をしようと思ったんですけど、急遽変えまして。いや、ネガティブ質問大好きなんで、干からびたヒマワリって頭にこびりついて離れないんですけども。

是非、今、どういった場面で、以前と今、幸せを感じる実感、よく、あのときこうだったよねという、どういう場面のとき、それを感じられるか、教えていただければ。

【栗原】　　前のときと今との違いを感じるときって、どういうときかなと。

【中村】　　やはり、皆さんも御存じ、ああいうような状態で、あれだけ大きな会社が国民の皆様にも迷惑をかけて経営破綻になったときに、私は末端の管理職でいたわけですけども、やはり私、ある時期は日航花子さんというぐらい愛社精神の旺盛な社員だったと思うんです。でも、私自身がこういう感じで言いたいことを言うので、左遷された時期もあったわけです。でも、会社に対する愛社精神じゃなくて、仕事に対する愛社精神、それが人と人を結びつけ、本当にトラブルとか、私たちは保安要員でもあるので機長の分身のような役割も、地上に伝えなきゃならない。それは本当にコーディネーターの仕事だったんですね。それが会社を辞めてからもいろいろなところで世代をつなぐコーディネーターの役割を担えたりとか、人と人をつなぐコーディネーター。やっぱり私は4人兄弟の末っ子さんなんです。茨城のど田舎で生まれて。でも、やはり32年間、会社が育ててくれたと思います。すごく感謝しているし。あの当時はJALのことを思い出したくない、あの職場を思い出したくないって、左遷もされたし、なんですけど、今、本当にこういうふうに会社に感謝しているという自分がうれしいです。やっぱり会社に対して、本当に育ててもらったと思っています。以上です。

【松田】　　そういう意味でいうと、今、中村さんが大学に通っていて、自分がすごく生きがいを感じるだとか輝いていると実感するのは、どんなときが楽しいですか。今でいうと。

【中村】　　すごく率直に言うと、会社の組織上、どうしてもリストラする立場でいた時期もあったので、やはり若い世代に嫌われる役、悪役を演じた時期もあったわけです。でも、今は大学院では20代から60代、世代を超えて同級生なんです。キャッシーと呼ばれていますので。やっぱりこういった新たな人間関係を構築できるというのは、人生捨てたもんでもないなと思います。

【臼井】　　僕、立教大学の女子って昔から憧れだったんです。振られましたけど。

昔の女子大生の時代と、それから今また女子大生になって、何か女子大生気質というか、当然年齢が違うというのもあるんですけど、どんな雰囲気の違いがあるのかということと、それに絡めて、よくある生涯教育じゃないんですけど、人生ずっと生きている間、学べますという中での大学というところで、改めて学びますってどういうことなんだろうかなと思って。

【中村】　　立教大学、リベラルアーツなんですけど、チャペルもあって。私は会社、乗務のときにやっぱり上司と合わなくて、何とか救いを求めて、実はひっそり母校の構内に何度か来たことがあるんです。そのとき、私はやはりジャンボ機世代なので、世界中を回って、長大特路だとニューヨーク経由でサンパウロまで行くし、そういう状況のときに、何か大学がミニチュアハウスみたいに見えたんですね。自分がJALの、うまく言えないんですけども、何か小さいな、世界中を駆け巡っていると、大学小さいなって、すごく僭越なんですけど、そう思っていた自分がいたんです。



もう一度、年をとって学び直してみると、やっぱりあまりにも学ぶことの奥深さ、1つ1つの学ぶ授業の奥深さに、大学ってこんなに大きいんだと思直したことがあって、実は3.11で、私、実家が茨城の沿岸部で被災しているんですけど、立教大学長が私たちの立教セカンドステージ大学の入学式のときにおっしゃったんですけど、何語かわからないんですけど、アジュールという、避難場所という言葉をや、池袋周辺の帰宅困難者の4、500人が、まるで灯台の明かりのように大学を目指してやってきたと。その話を入学式のときに私たちに話してくれたんですけど、その帰宅困難者と同じように、人生の艱難を味わってきた私たちも、へろへろになった企業戦士の、私もどちらかと言うとおじさん系なんですけど、企業戦士の私たちが、灯台の明かりのように大学の明かりを求めて集まってきたというお話をしてくださった。まさにそんな感じで集まってきたのが立教セカンドステージ大学の同期たちだったんじゃないのかなと思いました。ちょっと返答になっているかどうか、わからないんですけど。

【中村】 私ほど田舎に生まれて、常磐線のスーパーひたちで乗ってくる時も、なるべく早く上野駅に着きたかったほど、姉たちの東京の生活に憧れた末っ子だったんですね。だから、本当に学部生のときには東京の生活になれるのに必死で、勉強どころじゃなかったんです。でも、こうやって世界中を回ってきて、もう一度自分の母校に帰ってみると、学びの奥行きというのはまた違ったものを感じられるというのが実感です。 以上です。

【質問者】 先ほど、JALに勤められたときに左遷されたとか、上司と合わなかったというお話を伺ったんですけど、私が、ちょっと失礼になってしまうかもしれないんですが、女性があまり出世とかを意識せずに思ったことを言っている、言える力があると思っているんですけど、一方で、男性は上下関係を意識、周りを見た上で意見すると感じているんですけども、左遷とか、そういったことを覚悟の上で、どんどん言っていくほうがいいのか、男性の皆さんを意識して、周りを見て、意見していくほうがいいのか、どちらがいいと御経験された上で思われますか。

【中村】 結果的に、私が左遷されたタイミングで室長は女性だったんですけど、あなた、その言葉って覆水盆に返らずってわかっているわよねって言われて左遷されちゃったんですけど、私はそのときに下の子たちが中村さんはよく言ってくれたって言って、今でも慕ってくれている。だから、私はあのときに室長に対して歯向かわなかったら、今の私はないなというのは若干あります。

といっても、私のバージョンはオールウェイズワンパターンで、私は変わらず周りが変わっているだけで、本当に私の取り扱いに困った男性の上司が、「おまえはそのままでいいんだよ」と言った後に、「いや、そのままがいい」と言い直した上司もいたくらいですので、やっぱりはなむけの言葉としては、自分を貫くというのは大切なことです。それでまた会社を辞めなきゃならないことになっても、絶対いつか、あの判断は丸だった、周りにおもねったり、拘泥しないほうがいいと思います。 以上です。

【松田】 ほかに会場の方、いらっしゃいますか。大竹さん、やっぱりクラスメートとして、中村さんのここがいいみたいなことがあれば、ちょっとお願いします。

【質問者】 本当に元気をいただいたんです。私も50歳のときに独立をしまして、そのときに営業の管理職をやっていたんですけども、なった後がすごく大変で、代わりは幾らでもいると言われたような時代だったんです。やっぱりこれを私の一生の、ずっとこれから、本当に経済的にはすごく魅力があって、私の能力のなさが一番だとは思ったんですけど、やっぱりここでしたいことをしなかったら人生には限りがあるんだなと。いわゆる90歳までと今言いますけれど、健康寿命ということで考えると、そんなに長く、したいことができる時期、本当に元気でやりたいことができる時期というのは意外と短いんじゃないかなと思っているものですから、そういう意味では、今、やっぱりしたいことをしないと、何にとられるという価値観の、何を一番、自分の指針とするかというところをとりまして、独立して、結果的にはまたその会社からお仕事をいただいて、セミナー講師とか、いまだにそのお仕事をいただいているという意味では、会社にあまり尽くせなかったんですけども。